Leipzig, 1972-1973, part Ⅲ, pl. 163.

⑪ J. J. Clère et J. Vandier, *op. cit.*, p. 19.

⑫ H. E. Winlock, *op. cit.*, p. 62, fig. 37.

⑬ L. Klebs, *op. cit.*, S. 22, Taf. 14 ; A. H. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, P. 122.

⑭ 第1中間期の編年については以下の論文も参照した。吉成，前掲論文，321頁。

⑮ A. H. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs*, p. 439.

（[redacted]）

【新刊紹介】

塚本　学著

『近世再考—地方の視点から—』

（1986年10月刊　日本エディタースクール出版部・2000円）

戦後，日本近世史研究は膨大な史料発掘によって急速に進展した。特に在地の史料，いわゆる地方文書を利用した研究の進展はめざましく，多くの研究者が地方文書を求めて村を訪れた。それに伴い市町村史編纂も進められた。しかしそこで要求されたのは，一地方の分析からその地特有の問題をみるというよりは，如何に一般性を見出すのかということにあった。そのことはしばしばみられる「それは後進地域の事例である」とか「特殊な事例である」といった発言が如実に示している。

本書は表題が示すように，このような研究方法に対して疑問を投げかけてきた著者が既出論文をまとめて，自らの考える方法論を示したものである。

著者の方法論の基本は歴史の研究対象を民族や国家という単位に限定することの否定であるが，著者は近世における中央・地方意識，夷観念の検証を通じ，この主張を裏付ける。さらに日常茶飯事も豊富な歴史をもつとして，生活史と政治史との交流，歴史学と民俗学との交流を主張する。著者は具体的に「酒と政治」において，飲酒の変遷と社会のあり方の関係を追求している。

このような著者の方法論は参考とする点も多い。確かに文献史料豊富な近世史は他分野との交流も活発でなかったし，日常茶飯事に目を向けることも少なかった。しかし日常茶飯事や民俗学が単なる政治史なり事件史を理解するための補助材料としてではなく，歴史研究においてどれだけ有効性をもち，独自の歴史像を描けるのか，しいては地域の問題解明にどれだけ有効なのか，未知の世界である。

本書は「近世再考」であるが，その意味するところは歴史学全体に及ぶ。一読の価値は十分にある。　（岩城　卓二）